

## 「近未来の課題解決を目指した実証的科学研究推進事業」最終評価結果表

|       |  |
|-------|--|
| 研究領域  | 研究領域2 生活の豊かさを生む新しい雇用システムの設計                          |
| 研究課題名 | ジェンダー・格差センシティブな働き方と生活の調和：キャリア形成と家庭・地域・社会活動が可能な働き方の設計 |
| 責任機関  | お茶の水女子大学   |
| 研究代表者 | 永瀬 伸子（人間文化創成科学研究所教授）                                 |

## 評価結果

- S. 事業の目的に照らして、期待以上の成果があった  
 A. 事業の目的に照らして、十分な成果があった  
 B. 事業の目的に照らして、十分ではなかったが一応の成果があった  
 C. 十分な成果があったとは言い難い

## 評価にあたっての意見

子どものウェルビーイング・子どもの育ちの視点を軸として、学際的な研究メンバー（労働、家族、法制、心理学など）を有機的に組織し、国内外で多数の調査研究を実施し、実証研究に基づく多くの知見を生み出した点が高く評価できる。それらの成果は、今後の政策立案における基礎データとして有益なものとなろう。

とりわけ、パネル調査などの再分析によって、子どものウェルビーイングと父母の就労状況の関係が詳細に分析されており、中間評価を踏まえた対応がなされていることが高く評価された。

また、研究組織の運営では、研究者のみでなく、企業の実務家などとの議論の機会を設け、そこでの議論を政策提言に活かそうとした試みは望ましいものといえる。

研究成果の社会への還元では、研究論文としての発表や学会報告などに加えて、調査結果の概要をパンフレットとして刊行したことなどが評価された。他方、シンポジウムや公開報告会の参加者数が少なく、事前の広報面での工夫が必要だったと考える。

しかし、国内外で実施された多数の調査研究に基づいて、有益な知見が見いだされたものの、中間評価で懸念されたように、多くの調査研究による知見を有機的、複合的、理論的に検討し、子どものウェルビーイング・子どもの育ちという分析軸から深めるという面では、やや時間不足だった感が否めない。そのため、発見された個々の知見のなかには、既存研究のなかで既に指摘されている課題が少なからず含まれており、個々の知見に関しては、研究成果の期待水準への到達という面ではやや疑問が残る点が残念である。

今後、子どものウェルビーイング・子どもの育ちという視点から、今回の多くの知見を理論的に再整理し、実効性のある政策提言として深化されることを期待するとともに、成果がどのように活用され、具体的な政策展開につながったのかを評価し、フォローアップしていくことを期待する。